

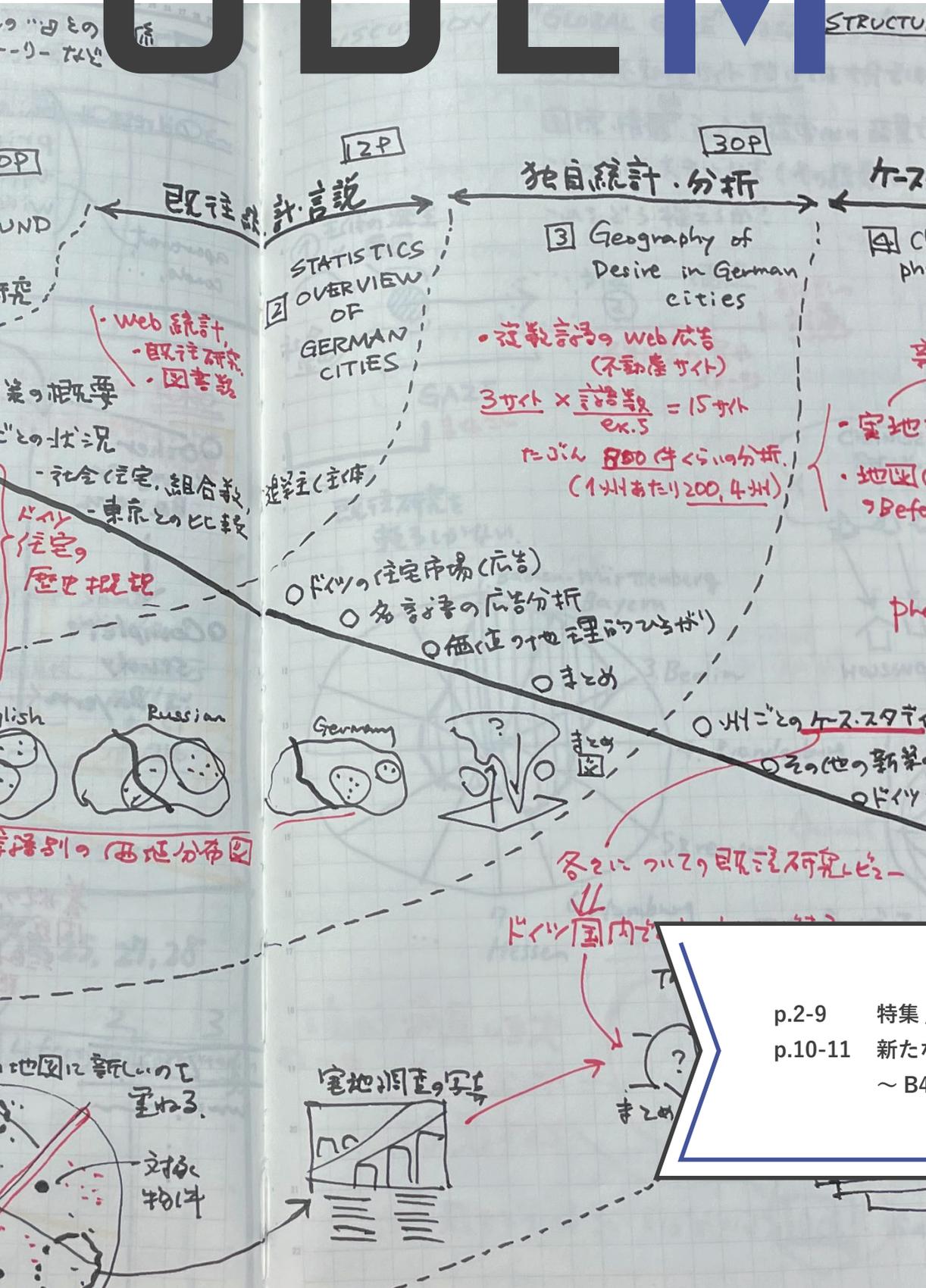
U D L M

5

vol.359

May 31st
2025

まなざしの先に



p.2-9 特集 / 吉江先生インタビュー
p.10-11 新たな仲間を迎えて
～ B4 新入生紹介～

△吉江先生提供：ドイツ滞在中の研究像

都市デザイン研究室・新講師 吉江俊 先生インタビュー

今年度より都市デザイン研究室に講師として、吉江俊先生が着任された。建築にバックグラウンドをもち、芸術や社会学にも強く影響を受けながら「都市論」を研究する吉江先生のこれまで、そして都市デザイン研究室でのこれからのことについてお話を伺った。
【聞き手】 M2: 星 / 松本 / 和栗, M1: 佐々木



吉江 俊 (よしえ しゅん): 東京都練馬区出身。早稲田大学創造理工学部建築学科を卒業、同大学で修士課程修了。後藤春彦研究室にてまちづくりの取り組みや建築設計に従事。2017年より日本学術振興会特別研究員DC2、ミュンヘン大学の訪問研究員。2019年に早稲田大学創造理工学研究科博士後期課程修了・博士(工学)取得、同年より建築学科講師を5年間務める。2024年より同大学リサーチイノベーションセンター研究院講師/次席研究員。早稲田大学にて2015年から10年間、空間言論ゼミを主宰。2025年より東京大学大学院工学系研究科 都市工学専攻 講師。

生い立ちと経歴: 画家、建築、そして都市の道へ

一本日はよろしくお願いたします。まずは経歴からお聞きできればと思いますが、出身地や幼少期、今に至るまでの流れについて教えてください。(星)

出身地は東京都練馬区で、西東京市にも住んでいました。3歳くらいから気持ち悪いくらいお絵かきをする子だったので、親が絵画教室に入れてしまえ、となつて、それからずっと絵を描いていました。画家のようなものを目指していましたが、中高で油絵などもやっているうちに、画家として生きていくのは厳しいかなと思ひ、理系の勉強に切り替えました。中高は東京大学教育学部の附属でした。僕は双子なのですが、東大附属は双子枠という特殊な入試がありまして、

その後は建築も受けてみるか、ぐらいの感じで早稲田大学だけ建築学科を受けたら合格してしまつて。建築のことはほとんど知らず、理系だけど絵が描けるかもしれない、ぐらいの感じでしたが…。早稲田大学は1学年に建築学科だけで当時は200人の学生がいて、課題があり毎週提出すると、そのトップ10だけが前に出て順番に発表し、それを190人が聞くという形式でした。そして先生が批評をし、終わったら解散。ですから、その次の週の課題で、次のトップ10になるのは誰か、ということをやつと繰り返すわけです。東大とはカリキュラムが異なり、作業時間も取らないので、授業以外の時間で睡眠時間を削って行きます。ですから最初は、東大で演習の授業が週に3回あると聞いて驚きましたが、作業時間もあるのだと後で分かりました。そのホワイトさが良かったですね。

早稲田では僕も例に漏れず建築家を目指していましたが、あまりにも戦いがひどすぎて、こ

で続けるのもどうかと思つたので、都市計画という分野に進みました。都市計画に来たら、その先は研究者かなと思ひ、博士課程に進むことを決めた状態で4年生から後藤春彦研究室に行きました。早稲田は建築の中に都市系の研究室が3つあるのですが、後藤先生は吉阪隆正研究室出身で、設計にも関心のある方なので、そこを選びました。そこから先は修士課程へ進み、博士課程を4年、講師を5年、研究員を1年務め、今に至ります。

一なるほど。先生の異様なまでの手の動き方のバックグラウンドを少し見た気がします。(和栗)



1. 早稲田の講評風景 (講師時代)

一後藤研究室に入ってから、どのような研究・活動をされていましたか？(星)

4年生で入った時の夏休みにオーラルヒストリー調査をするように言われました。その時は宮城県加美町という東北のまちで、2012年だったと思います。100人に話を聞くというものです。しかも、ご自宅か職場へ伺い、1人あたり1時間半ずつ話を聞くのです。これは大変なところに来たと思ひました。僕も意匠を目指していたので、そのようなヒアリングはしたことがありませんでしたから。東北の知らないおじいさんおばあさんの、非常になまりのある方の話を聞くというのは、非常にハードルが高いです。それを行ったのでかなり、コミュニケーション能力というか、まちづくりの人間としての教育をされたというか、ショック療法のような感じでした。そこから先は加美町に5年間関わったので、コミュニティ計画まで全て描きました。



2. 加美町でのヒアリング



3. 加美町での寝泊まり

一最初から100人にヒアリング…かなりの数ですね。その後博士課程に進まれてからはどのようなことに取り組んでいましたか？(星)

博士課程では、コミュニティレストランの設計もしました。撤去図から何から描きました。あれは本当に大変でしたね。基本構想、基本設計、実施設計と現場管理の手伝いを行いました。佐賀でも2年半、愛媛でも1年と、まちづくりに携わっていました。



4. 現場管理の様子

講師になってからの5年間は、民間企業とのプロジェクトが多かったです。自治体のまちづくりの仕事は、最小限のお金で行っていました。人口の少ない自治体が多かったですからね。自治体にとっては、コンサルに頼むより大学に頼む方がかなり少ない費用で済むのはメリットですが、こちらからすると、コンサルタントのように最短距離は進まない。こちらはアカデミックな関心があり、ワークショップの手法の開発や、住民参加やプロセスの公平性、まちづくりの計画のありかたのアップデートなどもやりたいことがあるので、そちらの追求にも付き合ってもらうことになる。そのような関係で、大学と自治体のまちづくりのプロジェ

クトは成り立っています。一方、民間企業が相手となると、巨額のプロジェクトになっていきます。そうすると、やはり資金をもらう分の責任が出てきます。こちらでもプロフェッショナルな仕事になってきますし、学生ができる範囲もかなり限られてきます。それでも、大学がコンサルタントのようになってしまつと意味がなくなってしまうので、あまり言いたくないですが、これから大学が民間企業とどのような関係を築いていくかを考えることが、講師になってからの5年間のポイントになっていました。

『<迂回する経済>の都市論』は、その5年間ぐらいを通じて、民間企業と大学がどういった関係にあるべきかというのを、かなり様々な意図を持って書いている本です。大きくはそのようなところでしょ

うか。

学生時代からつながる意識: 芸術と社会学

一それでは次に、学生時代について、先ほどお話があったかと思いますが、中でも今の自分に繋がっていると強く感じる経験、原体験的なものがあれば教えていただきたいです。(星)

そうですね、設計の課題でしょうか。早稲田はやはりデザイン系の課題が一番多く、3年生の最初の課題は美術館課題でした。ヴァルター・ベンヤミンという、むしろ都市論で読むような思想家の方がいるのですが、その方の美術館を作れという課題で、その時、皆はデザインが好きなので、ベンヤミンのパーサージュ論などを引用してきて、それを空間化するということをやっていました。僕は、そもそもベンヤミンは思想家なのだから何を展示するのか、展示するものがないではないか、と思つて。皆、それを考えずに空間だけを作ってしまうのです。僕は、ベンヤミンを展示できないからベンヤミンの思想に共鳴するような作家をまず4人選びました。そして、その作家の空間を4つ配置し、その間を廊下のようなもので巡らせるというプログラムを作りました。要するに、建物の形態よりもプログラムの方が好きだったんですね。卒業計画なども、基本的にはそういう構想の方が好きでした。そのようなことに気づいていったのが、大体3年生ぐらいの頃でしたね。それで、3年生のその時から社会学系の本をたくさん読むようになりました。



7. 卒業計画の一部として制作した木版画

見田宗介さんという東大の社会学者がいらつしゃいますが、3年の後期に彼の実集を購入しました。見田宗介は真木悠介という名前でも執筆していますが、真木悠介全集を購入して、とりあえず全部順番に読むということをやつたりしました。社会学では、見田宗介からかなり影響を受けていると思ひます。

一『<迂回する経済>』も拝読して、社会学の論点を論じていらつしゃる部分が多いなと感じました。それをまちづくり論で応用という点、取り入れていけるのだという点か、やはり面白かったです。社会学などに興味を持たれたきっかけは何だったのでしょうか。ご自身の昔からの思考の傾向として、そのようなものがあつたのですか。(和栗)

芸術と社会学はかなり近いものがありますよ。ですから、芸術系からの影響がもしもありません。子どもの頃に、それほどきちんとした芸術の理論を勉強していたわけではありませんが、現代芸術は基本的には社会学という脱構築のようなことをやるじゃないですか。社会学は非常にざつくり言うと、今私たちが普通にこうあるべきだと思つているものが、近代社会の中で成立しているだけのことで、別に当たり前のことでもないよ、ということをはっきりと示すのが、おお、すごい、というカタルシスがあるわけです。要するに、常識が覆されていく感じを実証的に論じるのが社会学です。芸術の方も、私たちが普通に思っていることをなぞるだけではあまり意味がありません。いくつか流派がありますが、一つは例えばロシアの「異化」などは、現実のある部分をものすごく誇張して描いて見せることによって、それを見た後に元の普通の風景を見ると、そのようにしか見えなくなる、というようなものなんです。ですから、そのような、この本で言うと「再帰性」という言い方になると思ひますが、当然のように受け取っていたものを一度壊してしまう、といったことは社会学や芸術に共通していて、そこは面白いと思ひました。

ただ、都市計画と社会学で言うと、実はそれをブリッジしている人は多くありません。社会学では色々な流派がいて、社会福祉の話や居場所論などをやっている人と都市計画は、もちろん自然と結びつきます。マルクスも結びつきますが、見田宗介やウェーバー系の社会学者は、心理的な、ドライとウェットで言うとウェットな方へ行くので、都市計画とはあまり結びつかないのです。

特に、ポストモダン以降の社会学や現代理論は非常に難解になってくるので、あれを読んだら都市計画はできないというか、何をしたらいいのか分からなくなってしまうのです。ですから、ポストモダン論は建築家は好きなのですが、都市計画の人たちはほとんど全員無視してきたという状態です。僕が結局やってきたことは、ポストモダン都市論をどのように都市計画にブリッジするかということだったな、というのが、空間言論ゼミというのを10年やってきて気づいたことです。



9. 空間言論ゼミ: 普段のゼミ風景



8



6

ですから、『<迂回する経済>の都市論』、というか僕が「都市論」と言っているものが他の人のもので違おうなというのは、やはり意識的にポストモダン都市論を導入しようとしているからです。原理的にこれは無理なのですが、それをどうやっていくかというところにポイントがあるのです。

基本的に、都市というのは矛盾しているもの、というのが僕の考えです。多分社会学で言うと葛藤理論派の人という扱いだと思うのですが、基本的に矛盾しているのです。そして、矛盾しているものがどうにか出来上がっている、というのが都市の一番面白さだと思うので、それに関する理論も、絶対に変な矛盾を孕むものになってくると思います。それが、『迂回する経済』に関してモヤモヤ、経済性と反経済的なものをどうブリッジするか、というようなことになってくるのです。そのようなモチーフで基本的に書いています。

言葉へのこだわり：積み上げられた感覚

一先生の第一印象として、言葉にする力、言葉の使い方が極めて洗練されているなと感じました。例えば『<迂回する経済>の都市論』の〈迂回〉もそうですが、それ以外にも『住宅をめぐる〈欲望〉の都市論』の最初の方に出てくる〈びょうさ〉などです。そういった言語化の力が、どのように学生時代から育っていったのでしょうか。(佐々木)



それは明確にあって、先ほど述べたように、早稲田大学では200人中の10人に入らなければいけない、という教育をされました。僕の場合はやはりそれがプレッシャーであり、ものすごく生き急いでいました。具体的には、文章を書いていたね。色々なものを見たり読んだりして考えたことを、エッセイ形式で書きました。書くとき整理されて次の段階へ進める。そして、それについては二度と考えない。一度書いたら終わり、というものにしたかったので、すごいペースで書いていました。誰にも読ませないのですがね(笑)

一課題に対応して、作品のコンセプト文のようなものを書いてたということですか？(佐々木)

課題とは関係ない内容も、とにかくたくさんテキストとして書いていました。

あとは、やはり後藤先生と吉阪隆正が、言葉を生み出す方だったという影響もあると思います。吉阪さんが一番すごいですよね。「不連続統一体」とか「発見的方法」とか。それから見田宗介もそういうタイプです。見田宗介は同じことを何回も、違う言い方で言います。こちらの方が格好良いか、あちらの方が格好良いか、というのを5回ぐらい繰り返します。ひとつに決める、とも思うのですが、言葉の力がすごいです。一方、後藤先生は、見田のような厳つい言葉は使わず、逆にまちづくりの人なので、やさしい言葉なんです。後藤先生はワークショップな

どで住民の前で挨拶をするすごい。ワークショップ自体は僕たちが運営するのですが、最後の挨拶だけ後藤先生に任せるのです。後藤先生はそういう時は、部屋の隅の方でじっとしているだけで、何も手伝ってくれない。そして、最後にニコっとしながら出てきて、すごい挨拶をして、そうすると皆が「今日はすごく良い日だったのではないか」と思って帰っていく、という。難しい言葉は絶対に使わない。一般的な言葉でありながら、その中に深みを持たせるような話し方の先生だったので、僕も気をつけるようになりました。

僕は「中程度の抽象性」と表現していますが、『迂回する経済』などもそうで、実体的なものが想像できないほどの抽象的な言葉は使わないけれど、かといって完全に実務だけの世界の話には絶対にしない、というバランスを取るという感覚は、後藤研究室で染み付いたことだと思います。

一ありがとうございます。私たち学生がこれから都市や建築を語る上で、本当に勉強しなければいけないことが多いと感じます。(佐々木)

サードオーダー的意識：弱みを晒しながらなお「つくる」

一それから、先生は著書で現代を「リミナルな状態」と表現されていますが、その上で『こうした状況下でなお「つくる」ことを肯定する理論を考える』という冒頭の表明に、私はとても共感しました。建築学科で学部時代を過ごした私の経験で言えば、提案がどんどん「つくらない」方向に向かい、つまり反建築的思考ということですが、プログラム重視の提案が多くなっていることに、時代の要請とはいえ違和感を感じることがあります。

建築家や都市デザイナー、そのほかの職能も同様だと思いますが、この難しい時代において「つくる」ということに対して、私たちはどう向き合うことができるのでしょうか。(佐々木)

そうですね。それは僕もすごく考えています。『スマート・イナフ・シティ』という本があって、タイトルが良いなと思っています。やはりスマート化をどこかで「スマート・イナフ」(十分にスマート)な段階に留めるということです。これは広い意味での「計画」ですよ。アカデミックにというか、理論的に突き詰めて考えることを皆ができるようになってきた。でも、どこかでそれを止めましょう、というラインを引くのが計画なのです。それができないと、破綻しますし、今も破綻していると思います。今の状況は、なにことも倫理的に極限まで突き詰めて非常に厳しくなっている人と、もう開き直っちゃってめっちゃめっちゃやる人という二極化をしています。これではダメで、やはりどこまでしましょうよ、というのを誰かが確信的にラインを引くというのが、大きくは計画であり、それが何か形を作るのです。色々な議論が、すごく成熟してきたのです。その上で、どこかに線を引きましょう、というのが計画学という領域であり、それがあらゆる分野でこれから必要になってくるのです。ですから、それを自覚的

にやっていくと良いなど。

ノルベルト・ポルトスという哲学者の、サードオーダーという概念を僕は大切にしています。まずファーストオーダーは、これが好きです、嫌いです、という選好です。例えば、都市に関して、ヒューマンスケールで下町みたいなものが好きな人がいるとする。でも、他の人は好きじゃないかもしれないし、あなたが好きなだけです。と、言われて終わります。

次にセカンドオーダーは、その下町みたいなものが好きという感情も歴史的に作られたものだ、と言います。それは近代社会の中の反動的な考え方であって、あなたはその近代の産物ですよ、と、言われてしまいます。私が信じているものは、社会が作り出したもので、あなたの考えではない、と相対化される。あくまで代代的なもの。あなたが今、この時代に生まれたからたまにまそうなのであって、30年後には違いますよ。社会学を含め、文系の学問の多くはこれをやっています。

そうすると、もう何をしても良いのか分からなくなっちゃうのがセカンドオーダーの帰結で、サードオーダーはその上で何かをやりましょう。これが計画学です。ファーストオーダーが計画学だと思っている人もいますが、それは違います。セカンドオーダーを経由して、なお何かをしようというのがサードオーダーで、だから非常に苦しいのです。何かしたら絶対に批判されるのですから、セカンドオーダー以降の世界は、

あと、私は割と単著を書きます。単著を書く人はあまりいませんよね、都市計画では。確信的にやっているのは、中島先生と齋藤先生くらいでしょうか。皆、共著で書いてしまうのです。都市がやはり、複雑で色々な問題があるので、皆で書いてバランスを取らなければならないんですね。その結果、それぞれの専門性から、それぞれの事例を教科書的に連ねた本が多いですよ。そんなに本同士の違いはないというか、「あの先生、ここでも書いていたな」みたいなものが次々に出てくる。

そうすると、都市の語りが無人称的になっていく。本を書く時は「お前は誰なんだ」「どういう立場で何を考えて言っているのか」ということから免れられないので、僕はすごく素直なことを書いています。「都市を構想する」ということが希望に満ちたものであってほしい」とか、「あえて作って弱みをさらすことにはなるが、作らないといけない、それを最大限考えましょう」ということを書くのが大切だと思います。共著になってしまうと書けることが本当に限られていて、都市計画という分野自体が短い文章の集まりになってしまいました。緑がいいね、とか水がいいね、とか自明なことばかりになってしまっ。分らないことを言って「なんで？」と言われたら、200ページ分説明しないと分からないようなロジックのことはできない。だからこそ、1人で200ページかけて説明しないとイケないようなことを考えないといけない、と思っているので、あえて単著ということにも結構こだわって、これからは書こうかなと思っています。



12. これまでの著書や制作冊子

「まちづくり」と「都市論」：並走の先にある結びつき

一(『<迂回する〜』の文中にある)「プロジェクトとして関わっていることと個人の研究関心が違った」ということについても、聞いてみたいです。(佐々木)

早稲田ではプロジェクトと個人研究が別で、基本的にはまちづくりのことはプロジェクトでやる、という感じです。東大ともやはり違って「輪講」というものがまずありません。プロジェクトは研究室ごとであって、研究室に入ったら自動的に全員参加になります。一方、研究は個人でやりますが、デザ研と一緒に何も用意されていなくて、自分の関心で自分で決めるという。

私の場合は、まちづくりの実務でやるようなテーマというよりは、ものすごく都市論っぽいもので卒論を書いていて、一方、まちづくりに行くと、もうそういう話は一切できない感じなんです。もう明らかに、差し迫っているんです。空き家などもありますし。まずネームバリューが全然ない町で、特産品とか地場の産業とかも全然なくて。大変ですよ。そういうところで何をやるのか、と。それで懇親会みたいな飲み会をやっても、そこの地元のおじさんとかに、「雇用を作ってくれ」とすごく言われるし。すごく差し迫っているから、私たちはどう役に立てるか、ということをとにかく考えて頑張るんですけどね。それと自分の研究とはどう関連するのだろうか、というか。

博士論文を書いている間僕は佐賀で活動していたので、同じ状態で、並走させるということをやっとやりました。そしてどこかで繋がってくるんですよ、不思議なことに。



13. 佐賀県多久市でのプロジェクトマネージメント

まず、僕が卒論や修論を指導する「空間言論」ゼミというのが、都市計画分野へのアンチテーゼで。「そんなものどうするの?それは都市計画の役に立つの?」とか「それはテーマにならないよ」と言われがちなのが、ゴリゴリの理論武装をして書くとか、硬派なゼミだった。アナキスト集団とか言われていました。でも自分たちの研究は建築学会の査読付き論文を通して、文句を言わせないという、すごく強い集団だったのですが、5年目ぐらいから色々なデベロッパーなどに興味を持ってもらえて。講演したり、研究を紹介するようなことが増えてきて。「あれ、都市開発の人たちがこれを求めているのか?」みたいな状態になってきて。

『<迂回する経済>〜』とかは今、かなり色々な人に読んでもらっています。「ちょうどそれに関心がありました」「まったく同じことを考えていました」みたいな人ばかりで、「本当かよ」と(笑)。



14. 空間言論ゼミ：夜会



15. 空間言論ゼミ：京都旅



16. 空間言論ゼミ：まちあるき

でも、都市計画という分野が手続き的というか、挑戦がしにくく成功事例をなぞることの多い非常に堅苦しい分野だと思っていましたが、僕が思っていたよりも、みんな内心はこういうこと(『<迂回する経済>〜』に書いてあるようなこと)を考えていて、それに共鳴してくれる人がたくさん増えてきたし、社会の側がかなり変わってきて、パブリックライフとかそういうものを議論しやすくなりましたよね。そのようなことで、僕たちがやってきたこと、都市論みたいなことが言語化できるようになってきたし、それが実務の現場にも、時々結びつくようになってきた、という感じですね。

一長崎市でもレクチャーされていましたよね。研究で訪れていた際に、担当者の方が「明日、吉江さんが来るんですよ」とおっしゃっていて。(佐々木)

長崎にも呼ばれましたし、福岡の天神ビッグバンにも呼ばれました。度々色々なところに呼ばれて、話をしたり、仕事につながったりして

いますね。ただ、『迂回する経済』も、やはり計画論なので、僕が本当に思っていることをただ書くということばかりしていません。やはり仮面の主体がいて、彼らに響いてもらえるように書いています。僕は基本は「壽饅頭方式」と言っていて、「毒ですよ」と差し出しても、「いりません」と言われてしまうので、「美味しいよ、美味しいよ」と言って、「あ、美味しそう」と食べたら毒だった、というのをやらないと基本的に社会は変わっていきません。『迂回する経済』も、ものすごくシュガーコートして、最初は「経済」とわざわざタイトルつけているので、企業人が読んでくれるのだけれど、読んでいる間に全然経済ではない話がまっちゃんうんですね、途中から。

一「企業に利用されるようには書かないぞ」という意志を、うっすら感じます。考えられていますね、やはりその辺は。(和栗)

結構いろいろな仕込みがあります。例えばジェイン・ジェイコブズが上手いな、と

いうのは、治安とヒューマンスケールのお話を結びつけられた、という点がすごかったわけです。古い伝統的なミックス型の都市が良い、ということ自体は、もっと昔のウィリアム・モリスとかワーズワースとかが言っていたものですが、ああいうもの自体は歴史上たくさんあるわけです。だけどジェイコブズだけがやはり都市計画の文脈で歴史に残っているのは、それが当時の主婦層が一番気にする「治安」という問題と結びつけて市民を味方につけ、(ライバルの)「モーゼス被せ」もしているのです。モーゼスは治安のためにスラムクリアランスをしようと言っているの、「私の関心も同じ『治安』ですよ」と言っています。モーゼスのいう治安を別の方法で、もっと本質的な方法で解決すると提案しているんです。そういう、説得のスタイルのようなものを、僕も目指しています。



17. ジェイン・ジェイコブズ

一先生のまち論とか、都市計画論を生かさせるための戦略とか、環境適応の戦略だったのかな、と。「毒饅頭方式」とかにはすごく感じているのですが、やはり社会学は批判して終わってしまうというのは私も感じているところです。

そこでサードオーダーで、じゃあその中で人間として生きる中でどうやっていきますか、みたいなところは確かに考えなければいけないなと思ったのですが、それは先生が実務的な立場に立っていらっしゃるから、そういう視点になるのでしょうか。

計画論の先生でも、ある程度論をストップさせることはできるという。セカンドオーダーでストップさせることはできるし、実際そういう人は多いのかなという風に思うのですが、実際に建築だったり、空間を設計する、みたいなところに当たっていらっしゃるからこそ、その生存戦略みたいな考え方が生成されていったんですか？(和栗)

どうでしょうね。やはり社会学が好きでたくさん読んでいたから、というのはあります。従来の計画学は、セカンドオーダーで止まるというよりは、セカンドオーダーをしないんですよ。セカンドオーダーを経由するともう計画できなくなっちゃうんです。だからすごく緻密にファーストオーダーを書くという研究が多い。例えばアンケートとかエビデンスを取って強化したファーストオーダーですね。でもアンケートを取ったからって、理論的な部分は強化されないですよ、本当は。そもそも指標に関しても、集計や分析の技術以

上に、やはり背景に思想みたいなものが絶対出てきてしまうわけです。そこから逃れられないのですよね。我々が暗黙に選択している思想的な部分を暴くのがセカンドオーダーなのですが、

僕はセカンドオーダー自体の面白さにハマってしまったというか、芸術や社会学がそうだったので。それにどっぷり一度浸かったんで、その後のことを考えないといけない、というミッションが、建築をやるときに自動的にできてしまった。それを一旦やらずにファーストオーダーにこもることができなくなってしまったので頑張っている、という感じです。「なんでそんなに辛いことをしているの」と言われます(笑)。でも辛いけれど、僕はそこが一番面白いと思ってやっています。楽しいと思ってやっています。

設計者として： 吉阪隆正へのシンパシー

一それから、設計者としての先生の側面も少し掘り下げてみたいです。都市デザイン研究室に赴任された初日、丹下健三と吉阪隆正はライバルのような関係で、私がかここに来る意義はなんだろうと話されていた覚えがあります。丹下健三が「東京計画1960」で海上に展開していく都市像を描いたことはよく知られていますが、これに対して吉阪隆正は、山手線の内側を全部線にして、谷ごとに掘り起こしていくような、小さな単位をつくるエコロジカルな提案をしたわけです。

これに対して、丹下健三にはあまりシンパシーを感じず、吉阪隆正にはシンパシーを感じるとおっしゃっていました。そういった観点から、先生の設計に対する思想であるとか、設計活動と都市論研究との繋がりが見えてくるのではないのでしょうか。(佐々木)



18. 丹下健三



19. 吉阪隆正

そうですね。吉阪にシンパシーを感じるということに関しては、突き詰めていくと、まずはサードオーダー的な考え方ができるということです。吉阪は「逆張りおじさん」みたいに扱われていますが、皆がヨーロッパを見ているのに韓国へ行っちゃうとか、そういうことばかりあります。彼自身がすごく孤独な、スイスの大使の息子で、第一次大戦後に平和教育を目的に国連が作ったエコール・アンテルナショナルという小学校がスイスにあり、そこに日本代表として入学し

ました。そこでは地図に国境が書かれていなくて、地理学者の先生から、国という概念なしに、この風土があって、こっちは砂漠で、そうすると住居がどう建ってくるか、そういう授業を受けたのです。それで、その後フランス語で受験ができる早稲田大学に入学したら、日本が第二次大戦に向かっていて、今和次郎は戦争の研究をしているし、大政翼賛会に入っている先生もいたりして、嫌だったでしょうね。そして講師になったら、徴兵で中国に行かされて、馬に乗って突撃していった。でもその時に、自分は絶対に死なないと思った、と。これは、もう使命があって、それは世界平和、相互理解について考えることだ、と言って。吉阪の場合はたまたま本当に生きて帰ってきたので、その後いろいろ考えるわけです。

だから当時、学生のころから社会とのすれ違いを強く感じて、建築家が無邪気に建築の話ばかりしているのも我慢ならなかったし、コンピュータの弟子に行った時も、コンピュータの設計には全然興味がないという。コンピュータも、戦後はユニテ・ダビタシオンとか、労働者の住居をどうするのかなど、かなり平和に対してのアプローチがあった。そういうところにシンパシーを持っているのに対して、日本の建築家のコンピュータ受容の無邪気さみたいなものには反発心を覚えたり、自分と社会のギャップを抱えていた。その中で出てくる色々な提案が、結構やはりサードオーダー的でとても良いな、と思います。

あと、吉阪の場合は人類学をやっていたので、視野が広がってくると、物質主義というか、材料を使って物を作るということ自体が、広い意味で捉えられるようになり、その中で建築とか物理的なアーバンデザインを考えていくという発想になってくる。そっちが大きくなってくると、造形は自由になってくるのですね、逆に。やはり建築家は造形だけを本気で考えるのですが、私はそれはもうできなくなってしまっただけで、もうそこから解放されて、造形は造形でできるようになった。その身軽さが最近出てきた感じがします。建築の仕事がこれからのすごく増えて、もう建築しか考えられなくなってしまうと、変わるかもしれないんですが、もっと色々なことがある中の建築、というのを年に1つ作るくらいだったら、もっと身軽に考えられるようになるのかもしれない。

ダイアグラムの蓄積： 手を動かして、残す

あとは、僕はシドニーでこういうノートをつけていて。

一おお、これはすごいノートですね。(星)



20

シドニーでは7年間ワークショップをやっているのですが、こういう色々なものを割と楽しんで考えられるようになってきて…

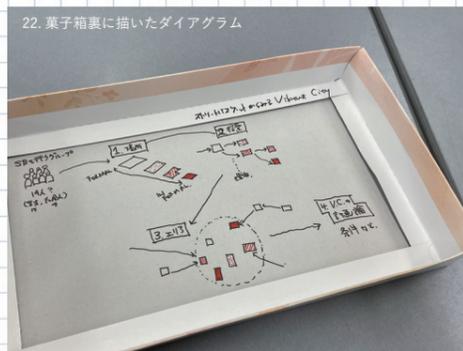
あ、これ。これ良いでしょう。これね、敷地条件なんですけど。イギリス軍の駐屯基地だったランサー・バラックスというのがあって、これの軸線と教会の軸線がずれている、というだけの図なのですが、それをどう使うかというのがこの敷地の空間的な課題だな、というところに行き着く、という。地図を何度かデフォルメして書いていくと、構造の課題が明らかになっていく、とかね。あまり難しく考えずに色々できるようになってきた、という感じですよな。



21. シドニー郊外のアーバンデザイン

一やはり絵の抽象の取り方がすごく上手いですよね。抽象化の仕方が。こんな簡単に描けるものなのか…(佐々木)

あとは天神の仕事があった時、ちょっと歩いて、お昼にラーメン屋さんで食べようと思ったら混んでいたんで、ラーメン屋に並んでいる間に書いたものもあります。天神って、天神駅があって、それを中心に道がクロスしているのだけれど、そうすると対象エリアは「天神の第四象限」じゃないの、と思ったので「天神第四象限」って名前つけて、こう分析していったりしてやっていくと良いよね、というところまで書いて、これをお昼後の打ち合わせに持って行きましたね。結構、スピーディーに色々考えられるし、そんなに悩まなくなってきたというのが最近ですね。



22. 菓子箱裏に描いたダイアグラム

一いつ頃から楽しんだり、悩まずに手を動かすことができるようになりましたか？(松本)

でもこの5年ぐらいですよ、本当。それまでは割と何か苦しいという感じですかね。学生時代はもう分からなくなっちゃってましたもん、なんか。3年が一番設計がきつい時期で。早稲田の場合は2年生で住宅、集合住宅という課題が出るんです。3年生で美術館、小学校、そして何か宗教施設とオフィス。それがものすごく忙しくて、もう本当に大学で寝泊まりしないといけないので。床で。皆そうやって。4年生からやはり都市計画をやったので、結構色々客観視できるようになって、今はとても楽な気分です。

一すごく大事ですよな。やはり一旦離れて、そのまま別の道へ行く方がほとんどの中で、設計にも戻ってきてやっているというのが、自分の中では理想だなという風に思っていることなのですが。(佐々木)

そうですね。そう言ってもらえると。

新しいスタート： 都市デザイン研究室にて

一ここからは、都市デザイン研究室での新しいスタートについてもお聞きしていきたいと思いますが、まず、ここに来た理由、きっかけとかは何だったのでしょうか。(星)

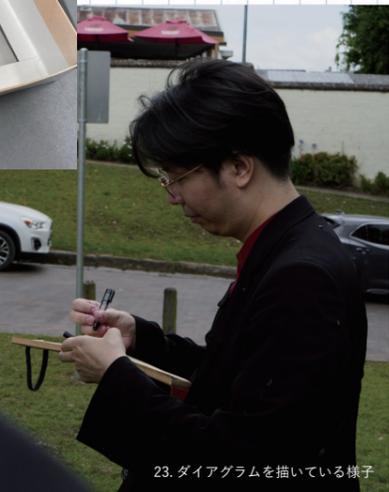
みんな聞きたいと思うけど、きっかけとかそんなないんですよ。

一先生方みんな怯えてますよ、中島先生とかも帯しめる！って感じで(笑)(和栗)

まあ早稲田怖いからね(笑)でも僕も公募なので、すごく自由で門戸の広い公募でした。

一早稲田でそのまま、とは考えなかったのですか？(和栗)

元々早稲田にずっといるのもなあ、と思っていました。早稲田は中央に対する周辺とか在野というのをすごく大事にしている。東京のど真ん中のプロジェクトではなくて、郊外をやったり、地方をやったり、農村をやったりというのが早稲田の特徴でした。70年代なんて誰も農村をやっていない、万博ばかり注目していたのに、



23. ダイアグラムを描いている様子

吉阪研だけ東北の農村をやっていた。建築学会に発表しに行ったら聴衆ゼロというのがあったらしいですから。それぐらいもう誰もやらない弱いところをやるぞというのが早稲田の強みで。

それでも良かったんですけど、どっちかという東大と対比的なんですね。シンポジウムとかやっても、ちょっと変なライバルみたいな感じになっちゃうんですよ。だけど、そういう二項対立的な構図でやっていてももしかたないな。やりたくなくてもやらないといけない難しい仕事を東大はやってるんですよ、簡単に言うと。だから、在野の精神で批判する側はある意味楽なんだけど、そうではなくて中から何か変えていかないといけないという一番難しい仕事も、両方をやらないといけないとは思いました。これは本当に本心で今思っています。

一やっぱり手を加えるなら土流から、ということですね。(和栗)

まあ、ただ僕はそんなに偉くなりたい、という欲求はないので。どうなるか分からないけど。中島先生も、短い間ですが接していて、とても信念があって、アカデミックな関心とか面白さみたいなのを大事にする方だと思うので、そこはとっても僕としては合うなというか、ありがたいです。僕もそういうことを大事にしたいなと思っています。

一研究室にいらっしゃってからまだ1ヶ月ほどですが、学生とか研究室への印象みたいなものは何かあったりしますか？この部屋の居心地とかでも良いのですが。(星)

難しいですね(笑)早稲田の研究室は学生と一緒になので。永野先生のような、ちょっとパーティーがあってみたいな感じだったので、こういう1人だけというのはあまりなかったので新鮮ですね。まあ、それなりにやはり環境は作っていくものなので、居心地を作っていくのかなと思いつつ、まだガラガラですけど、最低限はあるという感じですね。お茶はとりあえず持ってきた、という。

一美味しいです、このお茶。すごくおしゃべりなお茶ですね。(星)

さっきの少しね、味が濃いというか、「生茶レベル100」みたいなお茶です。



本当は日本酒が大好きなんですけど、最近肝臓を壊してしまったのでお茶にするしかない(笑)同じブランドで、磨きをこう変えて買って

飲むとどうなのか、みたいな少し研究者っぽいことを…この違いは何なのか、磨きの違いなのか、分からなくなっちゃうんで、やはり1回変数を固定しないとけない、というので色々やっていたのですがね。

話が逸れましたね。研究室の印象をちゃんと答えてなかったんですが、みんな自立してて、自由でいいなっていうのはもう、第1印象です。で、やっぱり早稲田と比べちゃうと、早稲田は200人もいるから学生を覚えてないですよ、みんな。自分の研究室に来てくれた学生は、とても可愛がるけれども。でも都市工はやっぱり教員がみんな自分の研究室とか関係なく覚えてるもんです。

—都市工は特に、35人強しかいないでもんね。(佐々木)

やっぱり、全学生を周りのみんなの先生が覚えてて、個人をちゃんと把握しながら全体のことを考えているというか、そこがすごいなと思いました。だけど、学生個人も個人でみんな結構バラバラに活動してるというのがとってもいいなと思いましたね。

—それでは、最後に都市デザイン研究室の学生に何かメッセージをお願いします。(星)

怖い人ではないので。色々なことやりましょう。まだやはり、今のデザイン研究室のメンバーとどういう風に接点を持ったら良いか分からないところが大きいので。会議の時に少し会ったりね。あとは、TAやってくれる人とかとは話せるんですけど、それ以外であまり接点がないので、何か一緒にやれたらいいですよ。扉の前に「WELCOME COME IN」と出ている時は、いつでもどうぞ。

—ありがとうございます。これから楽しみです。まだまだ聞きたいことはたくさんありますが…お時間なのでここまでにしたいと思います。長い時間のインタビューでしたが、ありがとうございました！(星)

*参照

- 6 : <https://book.gakugei-pub.co.jp/gakugei-book/9784761529123/>
- 8 : <https://item.rakuten.co.jp/tamurashobou/56890/>
- 10 : <https://books.rakuten.co.jp/rb/17400177/>
- 11 : <https://www.kinokuniya.co.jp/f/dsg-01-9784409241493>
- 17 : https://greenz.jp/2018/04/27/jane_jacobs_movie/
- 18 : <https://www.bs-tvtokyo.co.jp/rirekiisyo/33.html>
- 19 : <https://daizenbirupage.com>

12,20,24,25,26 : マガジン編集部撮影
その他 / P.9 画像 : 吉江先生提供

インタビュー実施日 : 2025年5月14日



25



1 好きな建築家は？



「レム・コールハース」
全体的に好きですが、シアトル公立中央図書館とかいいですね。



「象設計集団」
特に台湾の宜蘭県庁舎は素晴らしいと思います。沖縄名護市庁舎も良いですね。

6 好きな色は？ おまけ

「ウルトラマリンブルー」
※ 今月号のテーマカラーにしました！(星)

7 休日の過ごし方は？

「とりあえず新スポットを見に行ったり、美術館に行ったり…」

教員らしからぬ普通の過ごし方です。とはいえ消費の研究者でもあるので(卒論も渋谷を扱いました)、巷で流行っているものを体験してみて、何がいいんだろうな・みんな何を求めているんだろうなというのを、まず考えるというのを大事にしています。

2 好きなまちは？



「ミュンヘン」
一度住むと虜になるものです。

3 印象に残っている旅は？

「ドイツにいた時のひとり旅」

ひとり旅をよくしました。夜、ノートに地図を描き、都市構造を理解してから目的地を決めるなど、面倒なことをできていた贅沢な時間だったと思います。

4 原風景は？

「特にないかも」
特徴的な場所で生まれ育った訳でもないんで…

「最初に1番こだわったのは麻婆豆腐」

豆板醤2種類使うとか、豆豉を刻んで入れるとか。時間あると、花椒でオイルも作ったり。研究者気質で、「今のところの完成系」に辿り着くまで作り続けます。カレーも結構自信あります。

ドイツにいる時に始めて、今料理と都市みたいな研究もやっています。



自信作の料理を教えてください！

9 座右の銘は？

「ピンとくるものがありません」
自分で書いたものをしばらくして読んで、結構いいこと言ってるな、と思うことはあります(笑)

10 愛読書は？

「見田宗介全集」

他にも「ラディカル・オーラル・ヒストリー」(保苺実)「つかふ：使用論ノート」(鷲田清一)等。じっくり読むタイプです。



先生に聞きたいこと

新たな仲間を迎えて ~ B4 新入生紹介 ~

Introducing new members!

今年度から新しく5名のB4が都市デザイン研究室に加わります！個性あふれる面々が新しい風を吹かせてくれそうです。お互いをよく知る同期からの他己紹介にも注目してみてください。

飯島圭 (長野県上田市/理科一類)

自分を一言で表すと…好き。

デザ研を選んだ理由
今まで盲目的に認めてきた設計案を再認識するため。

今年目標
一人前の都市工学生になる

他己紹介 from 米倉美結
テキトーなようにいてテキトーでない。かと思ったらテキトーで、でもやる時はやる男です



米倉美結 (大阪府大阪市/理科一類)

自分を一言で表すと…好奇心旺盛。

デザ研を選んだ理由
設計やりたいなと思ってたのと、優しい先輩たちがいるからです。

今年目標
無理な計画を立てない。

他己紹介 from 鳴坂奏汰
誰でも明るく喋れるムードメーカーであり、要領良く何事も卒なくこなしてしまう生粋のしっかり者。徹夜も辞さない馬力も備える。



鳴坂奏汰 (神奈川県横浜市/文科二類)

自分を一言で表すと…真面目を装う怠惰。

デザ研を選んだ理由
都市の設計に関心があり、自由な研究室の雰囲気惹かれたから。

今年目標
計画的に卒業研究を進めることが最大の壁であり目標です。

他己紹介 from 吉田小乃果
物腰柔らかな雰囲気ながらコンペやPJなど、なんでも面白そう！と楽しんでいる都市工らしい好奇心のある人



自分を一言で表すと…不器用だけど考えるの大好き。

デザ研を選んだ理由
文化や歴史とまちづくりの研究をしたかったから。

今年目標
なんでも興味を持って一旦やってみる。

他己紹介 from 高瀬経勝
何でもテキパキと仕事をこなす職人タイプ。ズバッと鋭く的確な意見をくれる、頼もしい存在です…！

吉田小乃果 (東京都目黒区/文科一類)



自分を一言で表すと…歌人間。

デザ研を選んだ理由
設計をしたかったからです！

今年目標
計画性をもって健康的に生きたい…

他己紹介 from 飯島圭
初めて演習同じになって、今案出しの時とかに引張ってくれます。絵めちゃうまです。あとスマホの裏にカニのステッカーあったりいつもグミ食べてたり可愛いです♡

高瀬経勝 (東京都江戸川区/文科一類)



先日の新入生歓迎会では第1回の卒論・卒制発表をしてくださいました。5人がデザ研でどんな1年を過ごすのか、そしてどんな卒論・卒制を進めていくのか、とても楽しみです！

好きな場所にはその人の個性や人となりがあらわれるもの…ということで、新入生に聞いてみました！好きな通りを教えてください！



散歩中に見つけた文京区の住宅街の道

手前には戸建て住宅が建ち並ぶその奥に高層ビルが見えるのが不思議な感じがして好きです。

米倉



奈良井宿・旧中山道

歴史と文化が脈々と受け継がれており、過去と現在が交差する町並みが心に残ります。写真は夏祭り前の夜の奈良井です。

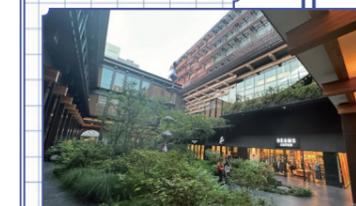
吉田



九品仏川緑道

通りの中心に植栽で囲まれた滞留空間が連なり、一度座ると離れたいほどの落ち着きが魅力。空が広く感じられ、沿道商店を歩いて巡るのも楽しいです。

飯島



新風館の中の庭園の通り

カッコよくて綺麗な建物と、緑の木々と、加えて小川みたいな、水が流れてる空間が好きです。厳密に通りではないかもしれませんが、実際どこにあるかわからないので同じような空間知っている人は教えて欲しいです！

鳴坂

東福寺・臥雲橋

人気のない自然の中にボツンと隠れてある神秘的な雰囲気感動しました。その先にある東福寺と光明院も美しくおすすめです。

高瀬



COLUMN

WEB MAGAZINE

続きはコチラ >>>
<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



上野いけまちウォーク



#上野プロジェクト

今年度からの新メンバー紹介を兼ねて、研究会の方々と不忍通りにて現地観察の街歩きを行いました。発見された課題を手がかりに、秋に実施予定の社会実験へ向け、計画をさらに詰めていきます。(M1 阿部)

おためしオープンアトリエ



#みなかみプロジェクト

あいにくの雨でしたが創り手の方々によるWSや学生たちで改修した建物内のカフェが開かれ、思い思いに過ごせる場所が生まれました。7月、9月にも実施し、旧ひがき寮の常時利用を目指します。(M1 田代)

休学高野の放牧日記 #2 都市と森林のあいだ



先日、和歌山県田辺市にて林業について学んだ。森林は都市と似ている。まずどちらも長期的な展望が必要とされる。建物が50年以上残るように、森林も伐採まで50年以上が必要で、人間が把握・予測できるスパンを遥かに超えてしまう。次に、都市で良い公共空間が直接収益につながらないように、森林そのものの災害予防・気候変動対策・健康促進といった公共的な価値を市場化できていないことで、公益性が失われている。最後に、理想の都市に正解がないように、森林の理想像も一意に定まらない。脱炭素・災害予防・林業振興等の目的、自然林に戻すか人間が介入し続けるか等、立場によって理想像が異なる。いま日本では皆伐地の約6割で植樹ができていない。都市も森林も、自分の土地だけでなく街や地球全体を考え、孫世代により良い社会を残すというパブリックマインドと、それを個人の負担ではなく社会全体としてカバーできるような仕組みや取り組みが求められている。

5月号担当 M2 星葵衣

今月号は吉江先生への2時間以上にわたるインタビューをお届けしました。先生がいらっしゃる前は、「強い先生がデザ研に来るらしい」というどこから来たのかもわからない話に少し怯えて(?)いましたが、都市への愛を言葉の端々から感じる先生でした。料理やお茶などこだわりの偏愛の数々も、聞けば聞くほど面白い。マガジン企画抜きにしても充実の時間でした。